

世界の美術館へ

西洋名画の貸出

メナード美術館の西洋の近代絵画コレクションは、印象派からキュビズムを経て現代へといたり、その内容は当館コレクションの中核をなすものである。その質の高さは定評があり、世界に名だたる美術館で開催の展覧会に貸出依頼の多いこともその証左と言えよう。

そもそもは、開館4年目の平成3年、ニューヨークのメトロポリタン美術館の「ジヨルジュ・ストラ展」に、当館のストラ《アンサンブル（サークスの客寄せ）》を展示したいとの申し入れが舞い込んだ。最初はお断りをしたが、メトロ所蔵の大作「ラ・パラード（サークスの客寄せ）」の原点をなすもので、どうしても両点を並べて展観したいと、作品輸送には最大限の措置をとるからと重ねての依頼、結局はその熱意にお応えしたのであった。

続いて平成6年、パリ市立近代美術館より、「アンドレ・ド・ファン回顧展」に当館の《ビリ

ヤード》の出品依頼。一九二三～一四年作の本作は、ランがアフリカの黒人彫刻の影響を受けた頃の貴重なもので、彼の回顧には欠かせぬものとの強い要請により承諾した。

引き続き平成10年、パリのオルセー美術館より「ゴッホとミレー展」に、ミレーを敬愛して止まぬゴッホが、ミレーの版画『一日の四つの時』の内の「一日の終り』を模写した作品の貸出依頼。ミレーの主題と構図だが、表現はゴッホらしい色彩とタッチの素晴らしい

作品、そのミレーとゴッホを並べたいと、我々を納得させる要請に出品した。

同じ年に、ニューヨークのグッゲンハイム美術館とサンフランシスコ美術館で開催の「ピカソと戦争展」に、当館の《静物》／ロー・ソク・パレットと牡牛の頭》を展示したいとの依頼。ピカソが戦争の悲哀を世に訴えた大作「ゲルニカ」に関連する作品で、展覧会の趣旨から必要との要請に応えて出品した。



ジェームズ・アンソール
《仮面の中の自画像》1899

中、首都の随處にポスターが見られたと云う。遠く離れた我々にも嬉しいことであった。

その他平成17年には、デンマークのルイジアナ美術館の「マティス展」に当館の《ヴェールをかぶった女》が、又平成20年、オランダのゴッホ美術館の「夜のゴッホ展」に再度『一日の終り』が、平成21年には、ニューヨーク近代美術館とパリ・オルセー美術館「ジエームズ・アンソール展」に再び《仮面の中の自画像》を貸出した。

これらの作品は、それぞれの作家の代表作品であり、又その作家の画業の中の重要な作品であることが充分証明されたのである。

(元メナード美術館顧問)

メナード美術館開館25周年記念コレクション名作展III 近代日本画と工芸コレクション名作展IV 西洋美術 7 / 11 / 10 / 6

6 / 30まで